巣ごもり鶴

ツルは、長寿の鳥と考えられ、またその優美な立ち姿は美しく、文学から芸能、美術まで、鳥の中でも最も幅広くその主題に採り上げられている。中国の前漢時代に記された『列仙伝』には、周の霊王の太子晋が、仙人となりツルに乗って去ったとあり、この故事から、皇太子の乗る車を「鶴賀」と呼び、ツルは高貴な象徴ともされた。常緑の松と取り合わせて描かれることが多く、さらに吉祥の意味が重ねられて、松の樹上に棲み、巣を作り、子育てまでする巣ごもり鶴へと発展した（挿図）。これらに描かれるツルの多くが、頭頂部の赤いタンチョウである。タンチョウは、見通しのよい湿原の中に棲み、ヨシを積み上げて地上に営巣し、樹上に留まることは決してない。遠目にツルによく似ており、高い木の上に巣を作るコウノトリの姿が、タンチョウに重ねられたと考えられている。つまり、松樹に棲むツルは実在しない、美術や文学の世界にのみ認められる姿なのである。

日本では七種ほどのツルが見られるが、国内で繁殖するツルはタンチョウ一種のみである。江戸時代までは禁鳥として狩猟が制限され、宮中へも献上されたタンチョウは、明治維新後の近代化のなかで、遊猟の対象となり、開発によって住み処の湿地が破壊されて、その姿を消した。大正十三年に北海道の釧路湿原でわずか十数羽が生息していることが再発見され、繁殖の数を増やすべく、今日もその保護活動が続けられている。

挿図　瀧和亭「松鶴図」　明治19年（《画帖》当館蔵より）

42　清水六兵衛（五代）
《鶴巣籠置物》
昭和八年（一九三三）
陶磁
三一・五×七〇・〇×二七・五

長寿のシンボルであるツルが巣籠もりをする図像は、不老長寿と子孫繁栄の両方の意味を兼ね備えた吉祥図像として知られる。この置物は、ほぼ実物大の巨大な陶製品で、京焼の鶴巣籠置物は他にも作られているが、これほど大きく存在感のあるものは類例がなく、同時代に京都の国立陶磁器試験場で製作されていた陶彫作品の影響も推測することができる。昭和八年（一九三三）の昭和天皇の京都行幸の折、京都府知事より献上された。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

鳥の楽園　―多彩、多様な美の表現
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 68

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十七年三月二十一日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan